

1. 10月24日プロトコル

村上優子

旧4巻『働くものから見るものへ』「表現作用」

170頁13行目から171頁15行目 表現作用となるのである。まで

『表現作用』において西田は自己が明らかになるプロセスについて機械的作用、合目的的作用、意識作用、表現作用さらに表現作用の中で言語、芸術、道徳、宗教と前者が常に後者に対し不完全なるものとして読者を導こうとしている。この体系は『善の研究』から終始一貫彼の著作において変わることはない。つまり読者を日常性の頹落の中から反省の立場に連れ出し（知的）その後意志の立場に導き（意的）一転、根本経験を経て宗教的覚悟に至るという道順である。どんなに複雑難解に見える文章の内にも常にこの形を含んでいるといえる。佐野先生の言われる「根本経験」を何度も何度もまるで牛の様に反芻しながら彼は、自らの人生問題に対峙しつつ苦しみから逃れるためいや、一層苦しむために書き続けたといえよう。なら『表現作用』においての最終段階におけるこの箇所には西田は一体なにをみつつあったのか。私は特にこの箇所に頻出する「包む」という表現をもって西田がこの時見ていたものを考えて見たいと思う。

この箇所は『表現作用』の最終局面である。しかし、この箇所は『表現作用』の最終局面であると同時に『働く者から見るものへ』の前編の最終局面でもあり、二重の意味で重要な場面であるといえる。この時期、私生活においては長年病臥にあった妻寿美の死があり、まさしく「根本経験」「転換」「超越」の箇所であったといえよう。その頃の書簡に「もはや私といふものはないのだ」(18. 323. 2)とあるが、それは西田が何度も繰り返し用いた「自己が自己を否定し自己の中に自己を見る立場」ともとれる。このような苦悩の中で書き綴った『表現作用』の最後において表現作用の最たるものが宗教であるという主張にいたった西田であったが「包む」といわれるもの、凡ての表現作用を「包むもの」は果たして宗教であったのか。ならばなぜ彼は「宗教家」ではなく最期まで「哲学者」であったのか。宮沢賢治がその死の床にあって法華教の経典を配るように父に懇願しつつしかし、なお同時に最期までその最後の著書「銀河鉄道の夜」に手を加え続けたように、西田も宗教によって解決を得る立場を選ばなかったのではないか。あくまで哲学によって苦しみ問いつける道を選んだ。その覚悟を前編と後編を分けたものとしてここにみてみたいと思う。

さて本編に戻ろう。「自己が自己を否定し自己の中に自己を見る立場」について、西田は之に広義があるとする。ならば狭義があるのではないか。ということになる。

「見られるものが見るものより大なる場合は云うまでもなく、見るものと見られるものが一つと考えられる場合も、尚真の直観とは云われぬ」(169. 13) これを広義とするならば次の「見るものが見られるものを包む時、始めて真の直観となるのである。」が狭義となり、之を西田は表現作用としている。前回のプロトコルでもあったように広義の自己否定を「集中、没頭、埋没状態といった〈日常性〉とするなら狭義における自己否定は「転換・超越・

根本経験」のような〈超越性〉に見ることもできよう。ここに西田はプロティノスの一者のようなものいわゆる宗教における「神」のようなものを想定したのか。つまり『善の研究』以来形をかえながら（統一的或る者、客観的实在）頻出し続けるこのようなものは宗教における「神」だったのか。確かに旧四巻序において西田は次のように述べている。

併し私は「自覚における直観と反省」を書いた時から意志の根柢に直観をかんがえていた。働くことはみることであると云ふプロティノス的な考えをもっていた。絶対意志といふ如きものを究極の立場と考へたのは、之に因るのである。(3.8)

「絶対意志という如き究極の立場」とは「一者」つまり『自覚における直観と反省』の頃の西田は「一者」に対し絶対的な神のようなものを見ていたといえる。一方、同じく序においてはこの『表現作用』については次の様に述べている。

次に「表現作用」に於て、真に直接に與へられるものを表現作用の内容といふ如きものに求めた。表現作用の意識に於いては、我々は主観的意識なくして見るのである。それは主観的意識を包んだ意識でなければならぬ。(5.2)

真に直接に與へられるものは「絶対的な一者」から「表現作用の内容といふ如きもの」にもとめている。つまり西田は我々の働きそのものにそれをみるようになったということだ。『直観と意志』の中に興味深い箇所がある。

水が我々の欲求の対象となるのは、我の要求によるのである。我の欲求は我の創造であつて、この欲求を満足するといふことは我を客観的に構成することである。即ち客観的に我をみることである。我々が水を味わふといふことは水を知ることであると共に、之によって我を見ることである。我々の欲求は物によって満足せられるかの様に考へられるが、我は我の中に我を見ることによって満足するのである。(41.9)

「水を飲む」という一見日常性に埋没して見える働き。これを西田は「我を客観的に構成すること」「客観的に我をみること」とし、果てには「我は我の中に我を見る」とまで言い、このことに我々は「満足する」とまで言い切るのである。また同箇所でも次のようにも述べている。

我々が色を見つあるとき、音を聞きつつある時、又真理を考えつつある時、色や音や真理が自己自身を直観しつつあると考へ得るであらう。(42.1)

注目すべきは色を見ること、音を聞くこと、真理を考えることそのいづれもが同等の働き

であるということだ。色や音や真理が自己自身を直観しつつあるということである。真理を考えることが色をみること音を聞くことと同等だという。これは『表現作用』でいうところの機械的作用、合目的的作用、意識作用、表現作用のその宗教にいたるまでが実はおなじであるということであり、いままでの『表現作用』における態度と矛盾するものである。ではこの『表現作用』で西田は何をいわんとしているのか。『表現作用』を包み真の働きにするものそれはなんなのか。プロティノスのいう「一者」絶対的な者、神のようなものなのか。

精神が働くといふことは、自己自身を見ることである。一つの精神作用が己自身を見つつ行くことが意志であり、それが元に還ることが直観である。(42.12)

プロティノスは一者を絶対的な流出の源とし、行為つまり働きについては「直観の弱き形」(39.1)「不完全な直観」(39.5)と考えたが西田はその働きを自己自身を直観するものとした。

併し無限なる作用の連続の根柢には、作用を超えたる不変の或物がなければならぬ。内面的質量ともいふべきものがなければならぬ。かかる内面的質量が形を包む時、形成作用は表現作用となるのである。(171.13)

機械的作用、合目的的作用、意識作用、表現作用そのすべてを包む「内面的質量」それはプロティノスのいう「一者」を超えたもの。そこに至ることによって宗教という名さえ捨てなければならぬもの。『働くものから見るものへ』の序において西田が求めたものにほかならない。

形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くと云った様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない、私はかかる要求に哲学的根柢を興へてみたいと思ふのである。(6.7)

2. おわりに

今、場所の成立と光について考えている。

我々が始めて光を見た時にはこれを見るというよりもむしろ我は光其物である。凡て最初の感覚は小児に取りては直ちに宇宙其物でなければならぬ。

『善の研究』を初めて読んだその日から、この文章が心をとらえて離さないからである。そして場所の成立の兆しのあるこの旧四巻において「包む」と言われる言葉が頻出するか

らでもある。『直観と意志』のその最後で西田は「ミンコフスキーの四次元の世界」について触れている。「ミンコフスキー空間」のことである。光円錐ともいわれるその空間図は時空上の一点からあらゆる方向に向けて発せられた閃光が描く時空上の軌道をいうらしい。つまり現在という一点から放たれた光が放つ軌跡を可視化したものだといえる。それはまるで砂時計のようだと私には思えた。過去から現在を通り、未来へと砂は流れていくだろう。砂時計の内部には「時」が存在するらしい。砂時計は「時」が満ちたときさかさまになってまた流れゆく。回転木馬のようにそれに終わりはない。その砂の一粒一粒は私たちの働きのひとつひとつである。無限なる作用 (171. 13) であり、それは終わることなき我々の日常性そのものである。砂時計の両端には鏡が存在し、合わせ鏡となっている。我々は砂時計の内部の現在という地点からその両端に映ったものを見ているにすぎない。砂時計の内部には「時」があるというがそれは本当に「時」なのだろうか。

我々の時と考へるものは、時時刻々に消え行く作用の形式を見て居るのである。閉じられた体系の中には、時はない、開かれた体系の中に於いてのみ、時を見ることができる。時は一つの閉じられた体系から、之を包容する背後の体系への結合と見ることができるであらう。(46. 13)

行き詰った円環としての日常から抜け出すため、その砂時計の外に存在する真の「時」を見るため、一つの閉じられた体系から背後の体系への結合のために砂時計は爆破されなければならない。私はとっさにそう思った。鏡は割られてしまった。映す場所さえ失った光は砕け散った破片ををきらきらと照らしながら私を包んでいる。そして私は身じろぎもせずただそれを見つめつづけるのである。

3. 哲学的問い

プロトコルを書いていたら娘が聞いてきた。「宗教と哲学の違いは何か」と。わたしは暫く考えて、哲学とは返事のない手紙だと思った。一体、宗教と哲学の違いとはなんだろうか。